

日本大学歯科部摂食機能療法学
植田耕一郎先生

会社員 奥山由美

「娘の集大成がつまった話」

テンポのいい話ぶりとは65歳には全く見えないあふれる植田先生のパワーに引き込まれ、あっという間の時間でした。

口腔ケアから、死生観までが看取りの医療にあること。

一番、目からうろこであったのが、歯科医師と口腔ケアが結びついていなかったこと。

学生さんの感覚も大半がそうだとおっしゃっていましたが、なぜか、歯科医師は歯を治す医師というイメージがあります。

先生の診察に長蛇の列ができたという話に納得。体は見てくれるけど口の中は見てくれない！確かに！そこに気づいた植田先生が前例を変えたのですね。

植田先生が話された内容は、1年半前に、脳腫瘍で発病からたった1年4ヵ月で旅立った6歳の娘の闘病の集大成であり、振り返りのような内容に、涙と共感で前のめりで拝聴いたしました。

QOLが一番であること。それが生きる力となり、精神力を伴うこと。まさに、娘が教えてくれたことであります。

娘の場合は、脳機能をむしばまれたことによる嚥下機能障害というところが、障害を持った方や、高齢による機能障害とはちがうところでしたが、病状が進行したところには、唾液でさえ誤嚥となり、肺に至ってしまったり、口を開けることすらできなくなっていき、バイトブロックをこじあげて差し込み、痰の吸引と口腔ケアをわずかの隙間からやっていました。

口腔ケアをしたほうがいいと教えてくれたのは、訪問看護師でした。娘以外の患者さんが高齢の方が多く、標準ケアとして行っているからでした。そこからYouTubeや資料をネットで探して行っていました。

危篤になり奇跡の復活を遂げた娘がまず発した言葉は、息絶え絶え声にならない声で「マンゴージュースが飲みたい！」

黒ビールが飲みたいといった男性の方の話と重なりました。そこから54日間生き抜きました。そしてその頃の口内は、舌苔がたまっていました。が、それは唾液がきちんと出ていて口が乾燥していない証拠である＝生きる力があったのだと、結びつきました。

今、摂食機能療法を学んでいる未来の歯科医師たちが、たとえ体が動かなくなっても、幸せの道筋を口腔ケアで導いてくれると嬉しく思いました。